

コードの実在性

— 『ヘンゼルとグレーテル』の共時的解釈(続) —

荒木正見

小論はコードの実在性について考察するものである。考察は具体例に沿って行われる。

その具体例は筆者が先に分析した『ヘンゼルとグレーテル (Hänsel und Gretel)』⁽¹⁾である。まず先の分析を参考に、『ヘンゼルとグレーテル』のコード図(パラダイム)を作製する。なお図1に記したパラダイムには先の分析では紙数の都合で割愛したコードもできるだけ記入した。

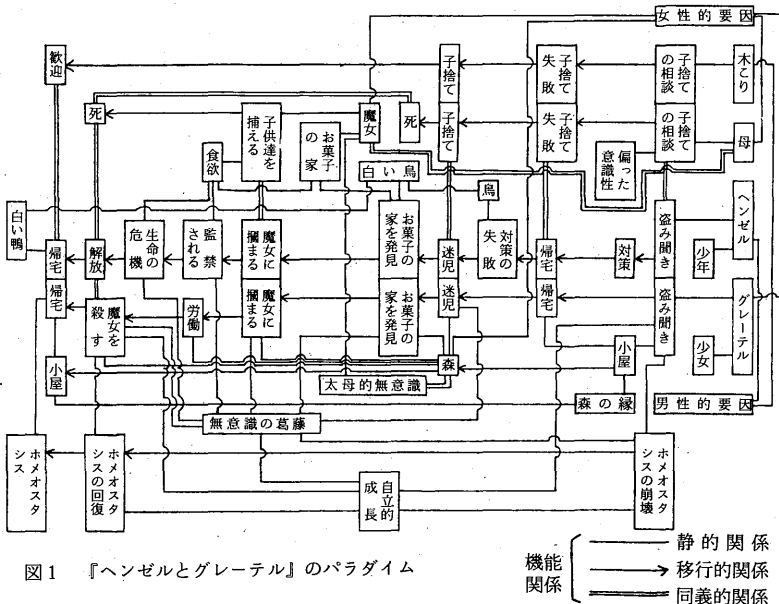


図1 『ヘンゼルとグレーテル』のパラダイム

図1に示されたコードはそれぞれに『ヘンゼルとグレーテル』というテキストを機能的に構成するコードである。またこの図全体はエーコ (Eco, U) が厳密に規定するコード、すなわち特定の統辞体系 (syntactic system) や意味体系 (semantic system)、行動反応 (behavioral response) の組合わせ⁽⁴⁾によって成立する殆んど唯一のコード⁽³⁾であると言える。筆者は先の分析でも見られる通り、コード分析に関して最も柔軟な立場をとり、上に述べられるようなすべてのコードをとりあえず共通の地平で捉え、それぞれのコード固有の概念を基にして概念相互の関係から、そのテキストに即したコードの概念を規定するという方法を試るものである。従って、エーコのように他のテキストにも互換性を持つ、統辞体系的コード、意味体系的コード、行動反動的コードを「S-コード」を呼び換えるようなことはしない。総てを「コード」と呼ぶ一般的な仕方をエーコはその曖昧さの故に批判するが、その曖昧さは図1のようなパラダイムによって充分補うことができる。更にコードそのものを分類しようとするエーコの立場と違ってコード分析を遂行する場面では全体としての唯一のコードとS-コードとの区別は殆んど意味を為さないであろう。

では、ここで示されるコードはいかなる存在であろうか。それがいま考察すべき問題である。コードの実在性を考察するというこの課題はテキストとは何か、或いは何をもちてテキストを呼ぶのかという根本的な問題に関わる。

いま『ヘンゼルとグレーテル』を考える時、テキストとしての『ヘンゼルとグレーテル』とは何であろうか。例えば筆者の手許には Giří Trnka によって描かれた魅力的な挿絵のついた “Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm (Vlg. Werner Dausien)” という本に印刷されている “Hänsel und Gretel” という童話がある。それはとりあえず物質的な存在である。だがその物質性を厳密にとろうとすると、『ヘンゼルとグレーテル』は紙とインクのみみに化けてしまう。そこで一歩進めて、それは文字という物質的存在ではないのか、と考える。なるほどそこにはドイツ語で印刷された文字がある。しかし、文字はその本質的機能を最大に発揮する時には自らの物質性を捨て、非物質的な意味を伝えるはずである。同じ意味を伝える媒体は印刷物であっても良いし、またブラウン管上の光の形状であっても良い。このように考え

ていけば、まずテキストは、我々の日常的感触からいって最もリアルな印象を与える物質的存在に限られるものではない。テキストは今や抽象的概念と化している。

そして、コードはその規定から、この目下のところ抽象的なテキストを理解し解釈する為の前提である。さらにコードのパラダイムを考慮に入れば、コードはテキストを構成しているものであると言ってもよい。しかし、テキストを構成するとは如何なる意味であろうか。この問は、コードはいかなる存在であるのかという問と相関的に考察されるはずである。

コードのパラダイムを画く際、我々は既にひとつの思想的前提に立っている。それは、個々のコードはテキスト全体にとって「機能 (function)」的連関に於て在るものであるという立場である。この立場はロシア・フォルマリストとして昔話の構造分析を試みたプロップ (Propp, U) にその端緒を見る⁽⁶⁾ことは言うまでもないが、またクザーヌス (Cusanus) の現代的理解を通して「機能」を思想的展開の中心に据え独自の「構造存在論 (Strukturontologie)」⁽⁷⁾を展開するのがロムバッハ (Rombach, H) である。

ロムバッハは最も完全な「構造 (Struktur)」を企図していると言って良い。

例えばロムバッハは「構造分析 (Struktur-analyse)」さえ、「すでに存在論的に前もって固定 (vorfizieren) された対象や対象類に結びつけられる」⁽⁸⁾ものであると規定して自らの「構造存在論」と区別する。ここで想定されている「構造」は、「多くのカテゴリーの秩序付け (Zuordnung)」⁽⁹⁾とされるように、分析すべきテキストを成立させる諸カテゴリーもしくは諸概念すべてを網の目のように結びつける「総合的関係 (Gesamtzusammenhang)」⁽¹⁰⁾であると言える。

この関係は、⁽¹¹⁾関係そのものに着目され、テキストを構成する「機能 (Funktion)」と名付けられて厳密に規定される。

機能とは或る「契機 (Moment)」⁽¹²⁾が他の契機に対する「相関性 (Relationalität)」である。「契機」はこの「相関性」によって規定されているという性質のみを持つ。よく似た概念として「要素 (Element)」があるが、「要素」は「相関性」によって規定されているという性質に加えて「自立的 (für sich)」なものであり、これら諸規定性の「担い手 (Träger)」であるという

性質を有する。¹³つまり「要素」にはその規定性以外にその「要素」そのものの存在があるが、「契機」の場合には規定以外、存在はない。

このように考えれば、「ひとつの機能体系に於て、各々の契機はその契機を持つ諸機能の総括 (Inbegriff) にすぎない」¹⁴ことになる。そして、すべての諸契機は相互に影響し合い、また全体の一契機と全体そのものとの間には隙の無い厳密な同一性¹⁵があり、「一契機が脱落することはその全体が消滅することである」¹⁶。

こうしてロムバッハは完璧な相関性によって部分と全体の実在的区別を消し去る。そこで浮び上ってくるのが「機能」そのものもしくは「相関性」である。そして、このように網の目のように張りめぐらされた「機能」はテキストの存在にとって欠くことはできない。端的に言えば、テキストとは何らかのテーマを持つものであるが、そのテーマがテーマとして存在するためには、そのテーマをテーマとすべき「機能」が存在しなければならない。

ところでこのように「要素」を否定するロムバッハの立場はひとつの典型的な議論として傾聴に価するが、実際の解釈を顧るときまた次のような問を生起させる。

それは、上記の立場における「契機」が独立の実在性をもって「要素」として解釈されることはないのか、という素朴な問である。それは「全体」の同一性をどのように捉えるのかという問でもある。

いま、「要素」と「契機」の対立を「ラジオのパーツ (部品)」を例に挙げて比較してみると次のようになる。一箇のICパネルが故障してラジオが鳴らなくなったとする。それを修理する際は、当の故障したICパネルを交換すればよい。「要素」として考えれば、このICパネルを交換して修理が完成したラジオ (全体) は故障していたラジオと同一のものである。しかし、はたしてそうであろうか。現に全体としてのラジオは、故障していたものが治ったのである。故障したラジオと治ったラジオとが同一であると言いきれるのであろうか。いうまでもなく、これが「契機」の考え方である。このように、部分を「契機」としてみる考え方は同一性に関して最も厳密な考え方であるといえる。

では、『ヘンゼルとグレーテル』の解釈においてはそれはどのように考えればよいのであろうか。いうまでもなく『ヘンゼルとグレーテル』は物語で

ある。物語の場合は先にテキストについて考察した通り、同種のパーツの交換によって全く異ったラジオになってしまったというような発想は意味を為さない。むしろ物語はその物理的媒体によって変質させられることなく、その意味やテーマが感動を伝えるところにその意義があるからである。

次に『ヘンゼルとグレーテル』を構成する個々のコードはどうであろうか。いま「森」というコードををとりあげて考えてみたい。

まず上に述べたように、「森」が『ヘンゼルとグレーテル』という全体が現実に語られる特殊状況にある場合はもはや無視する。いまや、「森」は『ヘンゼルとグレーテル』というテキストを構成する一要因として捉えられている。先に、筆者は「森」の意味を次のように考察した。はじめに、当のテキストとは独立のシンボリックの意味、すなわち女性的原理、グレートマザー、また束縛や文明化からの自由という意味を求めた。次に他のコードとの関係、とりわけ主人公や登場人物の行動がテキストの中で果たす役割、それもテキストのモチーフやテーマを明らかにする為にどのような役割を果たしているのかという「機能」を考察することによって、先のシンボリックの意味のうちどれに最も焦点を合わせているのかを決定した。その結果、『ヘンゼルとグレーテル』における「森」は「太母的無意識」という意味をその概念の中心に持つとされた。いうまでもなく、この考察の過程では「森」を、はじめは「要素」的に、そののち「契機」的に見ようとしたのである。

では、このように考察される「森」はどのような存在であると言えるであろうか。まず、少なくとも「要素」的に考察したという経緯がある以上、それは『ヘンゼルとグレーテル』というテキストから独立の存在であるといえよう。そしてまたパラダイムを画いたように、『ヘンゼルとグレーテル』を機能的に構成する「契機」でもある。この場合は「森」自身は独立した存在とはいえない。

我々の考察の手順に固執する限りこの二律背反は逃れられない宿命のようにも見える。この二律背反を解決する為にはより根本的な存在を考察するという、いわゆる意味論的解決を遂行しなければならない。

二律背反の意味論的解決の要点は、一見矛盾するように見える二つの概念相互がそれぞれ相関性を持つ異った存在の位置に属することを明らかにするところにある。「森」について、その考察は次のように行われる。

先に述べたように、テキストおよびその前提としてのコードはとりあえず抽象的な存在であった。この場合抽象的とは何ら特定の存在の様態を持たないという意味である。しかしこのことはむしろ積極的にテキストやコードが共通の存在であることを意味している。それは次のように考察されよう。『ヘンゼルとグレーテル』というテキストや「森」というコードはそれぞれ『ヘンゼルとグレーテル』もしくは「森」と認識される時にはその意味については曖昧ながらそれぞれ意識における表象として生起している。ここまでのところ両者はともに「現象としての存在」であると言える。その限りでは未だいかなる超越的な（客観的な）存在であるとも言えない。

しかし、次にこの両者は明らかに異った概念であるから意味の相違を有する。では、意味の相違とはどのような事態を指すのであろうか。

まずこの場合、『ヘンゼルとグレーテル』や「森」は、その自然発生的性格やそれに伴う無限の解釈可能性から、単なる「記号」であるというより「象徴」であるといわねばならない。「象徴」は、「表象(例えば物理的形状)」とその「意味」の関係が、「記号」のように限定されているわけではない。従って無限の解釈可能性があるわけであるが、その中である特定の意味を理解していく為にはその特定の意味がばらばらに存在する多くの意味のどれかひとつというのではなく、その特定の意味を矛盾なく位置づけることのできる特定の体系の関係の中に存在する意味として捉えなければならない。さもないと、本来無限の解釈可能性がある訳であるから、でたらめに何かを語ることがそのまま意味らしきものに当り、その行為は何ひとつ解釈したことにはならないからである。従って、『ヘンゼルとグレーテル』と「森」との意味の相違はそのまま、両者が成立するはずの多くの体系のうち、この場合にふさわしいそれぞれの体系の相違であることになる。

両者の体系の相違点のうち最も顕著なものはいうまでもなく一方がテキストであり、他方がそのテキストを構成する1コードであるという点である。先に述べたように双方とも「現象」でありながら生じてくるこの相違は、その両者がそれぞれ異った体系を現象の背後に担っていることによる。

現象の背後、それは発生を遡れば当面は潜在的な事柄を意識化する作用、つまり主観的性格を持つ「作用」として捉えることができる。

主観的作用は『ヘンゼルとグレーテル』をテキストとして構成し、「森」をコードとして構成し意識化する。この場合、テキストとコードという関係

を強調すれば、両者はそれぞれ先に述べた「機能」的体系において捉えられていると言える。しかしまた両者はそれぞれ「象徴」であるから、無数の体系を内包するものである。いまコードの実在性を考察するとき、この無数の体系のうち、「機能」的体系を成立させるのに密接な関係をもつ体系を検討しなければならない。

『ヘンゼルとグレーテル』の共時的解釈を通してこの密接な関係をもつ体系は「要素」としての個々の意味が成立する体系、つまり、「要素」的体系である。この体系を主観的作用は個々の事実（コード）が物理的実在、精神的実在等々の実在によって織り為されている世界「として」捉えている。

コードを「契機」として見ていこうとする立場と、「要素」として見ていこうとする立場とは、このようにその双方が異った作用の体系に属するものとして理解することによって当面の矛盾を回避することができる。

次に考察しなければならないのは、「機能」的体系と「要素」的体系との相互の関係である。これはもはや現象している事実からの規定を顧るよりほかはない。すなわち、コードはそれぞれ「要素」的に独立の意味を持つ独立の「実在」と「みなされる（後述の共通認識）」が、それらコードの意味は無限の意味を持つことができるという象徴的性格を持つものである。従って、それら個々の意味は統一体として欠損するものではないが、「契機」的にある側面を強調し、いわば焦点を合わせることによって他のコードとの関係を保ち、ひとつのテキストを構成するのである。このように、「機能」的体系と「要素」的体系とは、「要素」が象徴的意味を有する実在であると「みなす」ことによって相互に整合的関係を有することになる。

ところでここまでのところ「体系」は主観的作用に潜在する体系として語られてきた。従ってそこで使用される「実在」という語はあくまで「主観」という殻を被った「実在」、つまり主観によって「実在」と「みなされる」だけのものであった。そこではコードは「機能」的に働く「契機」としての面を持つことができる「要素」的独立性を持つ「実在」とであると「みなされ」た。

ではここで語られる「実在」に客観性を与えることはできないのであろうか。

「森」というコードを考えてみよう。すでに述べられたようにテキストを

離れた「森」というコードには様々な意味が想定される。それらの意味はそれぞれふさわしいテキストのもとでは適確に焦点合わせられ活き活きと機能し始める。そのすべての機能可能性を考えると、コードの各々の意味は（そして、その統一体としてのコード自身は）、普遍的な性格を持たなければならない。その理由は次の通りである。まず、最も普遍性を考慮しなければならない解釈の場合、すなわち複数の主観によって共通に認識されなければならない場合、「共通認識」というまさにその点において普遍性を必要とする。逆に、一個人の特殊な思い込みの状況はどうであろうか。この場合は一個人の特殊な思い込みの内容自身がコード化され、それについてはやはり第三者的な共通認識を必要とする。結局、コードは厳密に考えればいかなる意味においても普遍的な存在でなければならない。このように、「共通認識」すなわち「共同主観」を媒介にした客観的実在性の確認はフッセルの「間主観 (Inter-Subjekt)」の議論に依るものである¹⁹ ことはいうまでもない。

こうして、コードはまさに実在であり、それはテキストに於て、要素として存在するばかりではなく、契機として機能することが、またその相互の関わりが明らかになったと言える。ここから必然的に導かれる方法論についてはまた筆を改めて述べたい。

(1985.1)

(註)

- (1) 拙論：『ヘンゼルとグレーテル』の共時的解釈 — 構造分析とコード分析 — (梅光女学院大学論集第17号所収)
- (2) Brüder Grimm: Hänsel und Gretel, Kinder - und Hausmächen der Brüder Grimm (Verlag Werner Dausien)S.189-S.195
- (3) Umberto Eco: A Theory of Semiotics (Indiana Unversity Press) p.37
- (4) 註(1)参照。
- (5) 註(2)参照。
- (6) 拙論：共時的解釈の構造 (梅光女学院大学論集第15号所収) 参照。
- (7) Heinrich Rombach: Strukturontotogie—Eine Phänomenologie der Freiheit(Verlag Karl Alber)
- (8) ibid. S.16
- (9) ibid. S.21
- (10) ibid. S.21
- (11) ibid. S.25
- (12) ibid. S.25
- (13) ibid. S.25
- (14) ibid. S.27
- (15) ibid. S.34
- (16) ibid. S.34
- (17) 註(1)参照。
- (18) 拙論：「記号」と「象徴」(梅光女学院大学論集第13号所収) 参照。
- (19) 紙数の関係でその詳細は省くが、メルロ・ポンティ (Mourice Merleau-Ponty) の『知覚の現象学 (Phénoménologie de la perception)』序文ではこの点について端的に述べられている。